

銚子沿岸地域における籐加工業と漁家経営

— 伝統的家族経営における家族構成員の役割 —

湯澤 規子

I はじめに

1) 問題の所在

銚子の沿岸地域には、様々な女性の就業機会が存在した。以前、拙稿では銚子市長崎について検討した際、女性就業として海女、オッペシ¹⁾、行商、籐加工業、水産加工業などが確認された²⁾。その後の調査において、特に籐加工業と水産加工業は長崎に限らず、漁業の卓越する銚子沿岸地域に広く分布する女性就業であることが確認された。そこで本報告では、銚子における女性就業の中でも特に籐加工業に着目し、銚子沿岸地域における籐加工業と漁家経営の関係を明らかにすることを目的とする。

銚子における籐加工業を個別に扱った研究はほとんどないが³⁾、文献に散見される籐加工業についての記述をみると、籐加工業は地域の製造業の1つとして位置づけられており、漁家の副業として漁家の婦女子が従事し、家内工業という形態が一般的であったという点が言及されている⁴⁾。しかし、主業である漁業との関係や、家内工業を維持する家族内分業の実態についてはほとんど明らかにされておらず、漁家経営においてどのような位置づけにあったのかという視点から籐加工業を検討した研究は管見の限り見あたらない。

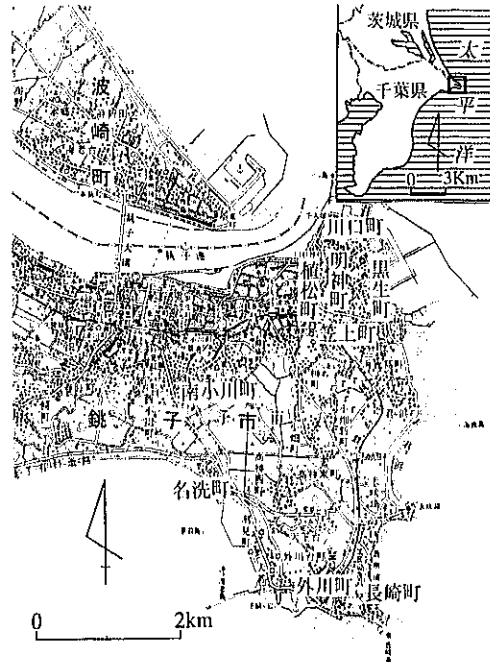
その理由の1つは、籐加工業が主に来産業という枠組みの中で検討されてきたことにある。籐加工業に限らず、地域に展開する大小様々な産業は個別に検討されることが多いため、各産業が地域の中でどのような関係を有しながら成立しているかが言及されることは少ない。筆者は漁家経営という単位において、家族構成員レベルの就業構造を検証することで、地域の諸産業を羅列的にで

はなく、関連付けて言及しようと考えている。しかし、漁家経営、広義には家族経営の内実を明らかにするためには資料的制約が伴うことも否めない。

2) 方法

本報告では、家族構成員レベルで家族経営を明らかにする資料の1つとして、子どもや女性が書いた生活記録的な性格を有する文集を活用し、並行して聞き取り調査によって情報を収集した。

具体的には子供の作文として、波崎第一中学校の生徒達の作文集である『魚の町の子供たち⁵⁾』



第1図 研究対象地域
(平成5年国土地理院発行5万分の1地形図「銚子」に加筆)

を資料とする。波崎町は利根川をはさんで銚子市の北に位置し（第1図）、漁業とその関連業が地域の就業構造上、重要な位置を占めていることや、簾加工業の集中地域を含んでいる点で、銚子市と共通している。波崎第一中学校は生徒数970名であり、家庭の職業をみると約55%が漁業、30%が農業、15%が商業その他であった。また、漁業世帯の内80%以上が船方と呼ばれる漁夫を父兄にもつ世帯であった⁶⁾。このことから波崎第一中学校の資料は銚子の簾加工業と漁家経営を明らかにするうえでの資料になると判断した。

女性の作文としては、女性9人によって構成される明神町読書グループが昭和42年（1967）から昭和45年（1970）までに刊行した文集『麦⁷⁾』を資料とする。執筆者である9人の女性のうち、6人の夫は漁船員であった。以上2点の文集は、当時の日々の生活を描写した文章を多く含み、1950年代から1970年代の銚子周辺の漁家の暮らしを復原するための情報を提供してくれる。

本報告では、銚子沿岸地域のうち簾加工業の集中地域の1つであった明神町、川口町、植松町、笠上町、黒生町に焦点を当てる（第1図）。この地域は旧飯沼地区東部の飯貝根地区に相当し、川口2丁目に属する川口神社以東から、利根川河口の千人塚にかけて広がる。飯貝根浜は干場として利用されてきた歴史をもつ、いわゆる漁業の町である。5町は明神学区と称される1学区を形成しており、『麦』を刊行した女性達の居住する地区でもある。

簾加工業は明治期からの歴史を有するが、本報告では特に1940年代から1970年代までの状況を検討する。1960年代後半に開始される鹿島臨海工業地域の開発を含めた労働市場の変化や、1980年以降に確立した漁業の近代化による大量漁獲システムなど⁸⁾、高度経済成長が漁家経済に及ぼした影響などについては別稿に譲ることとし、本報告では、それ以前の漁家経営について検討する。

以下第Ⅱ章では簾加工業の歴史的概観と分布を明らかにする。第Ⅲ章では家族構成員レベルでの漁家経営を復原し、漁家経営における子どもと女

性の役割を検討する。第Ⅳ章では、漁家経営の特徴と、女性就業の特徴を簾加工業を通して考察する。第Ⅴ章では、地域産業と家族経営との関わりを予察的に述べ、むすびにかえる。

Ⅱ 簾加工業の分布と展開

1) 第二次世界大戦前における簾加工業

銚子で簾製品が製造されるようになったのは明治後期からで、大正から昭和にかけて簾加工業は銚子における主要な在来工業の1つに成長した。最盛期は昭和戦前期であった。『銚子市史⁹⁾』は簾加工業について「漁村民の生活は、一朝シケ（時化）がつづいて不漁となれば、直ちに其の日に追われる困難に陥るが、この不安定な生活の一助に取り上げられた家庭内職が簾表¹⁰⁾の製作であった」と述べている（写真1）。『鹿島郡郷土史』には「漁村地の婦女子に最も適切なる副業」として簾表編が明治34年（1901）から導入されたことが指摘されている。つまり、簾加工業は漁の有無に左右される漁家経営の不安定さを軽減するための婦女子の副業であったといえる。

昭和15年（1940）の『商工案内』によって簾加工業の関連業者を確認すると、少なくとも仲買業者、卸売業者、製造業者、原料商（丸簾屋、簾芯屋）が存在しており、複数の業者による産地内分業が成立していたことが窺える（第1表）。また、製造業者の下請けとして多数の内職従事者の存在

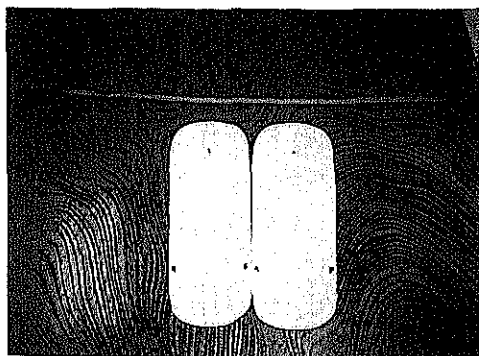


写真1 簾表と簾を編む道具
（2001年6月に撮影）

が想定される。工業組合としては銚子籐製品工業組合が成立していた。

戦前の籐製品の生産状況を市の統計資料によってみると¹¹⁾、昭和8年(1933)末では、製造場数164戸、職工数235人、うち男性75人、女性160人であった(第2表)。職工の男性は挽籐職人¹²⁾とみられ、女性は製造場の常備従業員とみられる。ただし、この統計では内職として自宅で籐加工に従事した人々の数は確認できない。製造金額は134400円であり、そのうち98.7%にあたる131400円が籐表によるものであったことから、当時の籐加工業のほとんどは籐表であったことがわかる。当時の銚子地域で主要な製造業の1つとして甘藷澱粉加工業があったが、同年の甘藷澱粉の生産高は90111円であり、籐加工業の生産高を下回っている。このことから、当時の銚子地域において籐加工業が重要な産業の1つであったことが窺える。高神・海上両村を合併した後の昭和12年

(1937)末の状況は、製造場数987戸、職工数1093人、うち男性76人、女性1017人であり、製造金額は336000円であった。籐表は昭和15年(1940)頃には年産500万円から800万円をあげるに至った¹³⁾。

2) 第二次世界大戦後の籐加工業

籐製品の原料となる丸籐は銚子周辺で生産されるものではなく、全て輸入されていた。したがって、太平洋戦争中から昭和23年(1948)まで、丸籐が入手できない時期においては、籐製品の製造は停止された。

第二次世界大戦後、昭和24年(1949)に丸籐の輸入が再開されると同時に籐製品の製造も再開された。昭和30年(1955)以降は「これによって衣食するもの、市内に数千、波崎を含めれば恐らく万を越える¹⁴⁾」産業となった。『続銚子市史¹⁵⁾』は銚子、波崎が籐製品の全国の特産地になり、籐加工業が銚子独特の産業であると述べている。しかし人々の生活様式の変化に伴って、履物も草履や下駄からサンダルになり、主製品であった籐表の需要が減少した。籐表の生産量は1970年頃から少量になり、昭和25年(1950)には月産にして20800足であった籐表が、1980年代には500足程度になった。

一方、新たな製品として第二次世界大戦前から徐々に生産されてきたバックレスト¹⁶⁾や乳母車、スリッパ、椅子などが生産されるようになった。特にバックレストは日本の自動車産業の発展とともに需要が伸び、籐表に代わる主製品となった。しかしこのバックレストもまた、1970年代以降の

第1表 籐加工業の関連業者
—昭和15年(1940)—

商号	氏名または名称	営業所	営業品目	業態
林商店	林 泰三	前宿町	籐表	小
一	福田 清治	南 町	籐表・籐細工	製請
奥惣右衛門	鈴木平治郎	外川町	籐表	製
松本商店	松本傳次郎	外川町	籐表	製
小林商店	小林小三郎	外川町	籐表	小仲
高崎商店	高崎敬三郎	愛宕町	籐表・籐芯	卸
佐藤商店	佐藤 文吉	新生町	籐芯・石炭・雑貨	小
宮銀商店	宮内銀太郎	新生町	籐表・軍手	卸小
根本商店	根本 定吉	新生町	籐表	小
安藤商店	安藤清三郎	本通町	籐表	卸
田原商店	田原 榮治	本通町	籐表・味噌	製卸小
田原商店	田原 一之	清水町	籐表・履物	製卸小
吉川商店	吉川喜三郎	清水町	籐材・籐表	製卸
梶木商店	梶木彌五郎	西芝町	籐表	卸
小林商店	小林徳次郎	西芝町	籐(丸籐)	卸小
渡邊商店	渡邊 伸治	西芝町	籐表	小
下ノ小幡	宮内榮三郎	高神町	籐表	小
吉川館	宮川 大助	黒生町	籐表・旅人宿	製

(『銚子商工案内(昭和15年)』により作成)

注: 1) 一は記載のないものを示す。

2) 業態については資料の記載に従った。

「小」は小売、「製」は製造、「卸」は卸し、「仲」は仲買と推測される。

第2表 籐製品の生産者と生産状況
—昭和8年(1933)、12年(1937)—

	昭和8年	昭和12年
製造場数	164戸	987戸
職工数(男)	75人	76人
職工数(女)	160人	1017人
籐表製造金額	131400円	336000円
その他製造金額	3000円	—

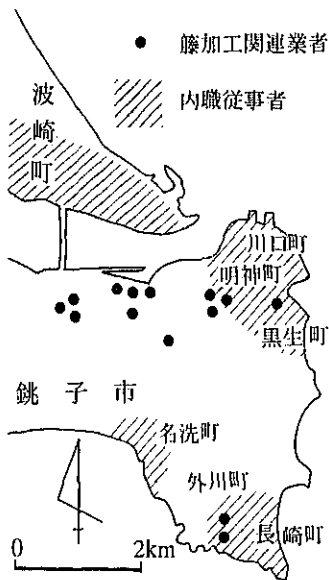
(『続銚子市史Ⅲ昭和後期』119ページ。により作成)

注) 一は記載がないことを示す。

カーキラーの普及によって需要、生産量ともに減少した。この時期以降、銚子における籐加工業は布団たたき、枕、脱衣かご等の小物類の生産へ転換した。

3) 分布

以上のような推移の中で、籐加工業が主に女性の内職として定着していたということは変化していない一面であった¹⁷⁾。第2図は昭和15年(1940)の銚子における籐加工業の関連業者の分布と聞き取りにおいて確認した内職従事者の分布を示したものである。関連業者は主に沿岸地域に立地していることがわかる。聞き取りによれば、内職従事者は川口町、明神町、長崎町、外川町、名洗町そして、対岸の波崎町等、いわゆる漁業集落に広く分布していた。かつては、この地域の漁業集落において籐表編みの経験のない者の方が珍しいといわれた程、籐加工業は盛んであった¹⁸⁾。



第2図 籐加工業関連業者と内職従事者の分布
 (「銚子商工業内(昭和15年)」及び聞き取りにより作成)

Ⅲ 漁家経営の復原 — 籐加工の風景 —

1) 沿岸地域における職業構成

第3表、第3図に昭和30年(1955)における銚子市の学区別の職業構成を示した。籐加工業の製造業者が多く分布する地域は高神学区、明神学区に相当するが、両地区は銚子市において漁業従事者の割合が非常に高い地区であることがわかる(第4図)。明神学区の職業構成に注目すると、製造業の従事者が最も多く、全体の37.0%を占めている。漁業および水産養殖業¹⁹⁾がこれに続き、22.5%を占めている。聞き取りによれば、製造業には水産加工業が多く含まれると推測される。業種別の世帯数は第4表のようになる。労働力世帯1564戸のうち、26.3%にあたる412戸が漁業および水産養殖業であり、27.0%にあたる422戸が製造業であった。

明神学区は籐加工業者が立地し、内職従事者も集中していた地域といえる。それを考慮すると、籐加工業の内職は上記のような職業構成をもつ地域に属する世帯において行われていたと考えることができる。

明神学区における世帯別の職業構成をより詳細に示す資料として、昭和51年(1976)の明神小学校における在籍児童の保護者職業一覧を第5表に示した。年代が異なるため、第4表と単純に比較検討することはできないが、各業種の小分類として参考にすることは可能である。全校生徒数976人、世帯数としては722戸分の職業構成である²⁰⁾。会社員世帯が152戸と最も多く、次に漁業世帯が125戸であった。また、漁業関連世帯として水産加工、海産物問屋、水産用機器販売、製缶工、鮮魚商、漁業会製氷工場、網大工、魚市場、船大工、冷凍機業、冷凍食品業、漁業協同組合職員を含めると198人となり、漁業関連世帯が最も多くなる。聞き取りによれば、会社員と明記して提出された調査票であっても、実際には水産加工業従事者である例も多く、実態としては漁業関連世帯がさらに多くなるものと推測される。

2) 家族構成員とその就業

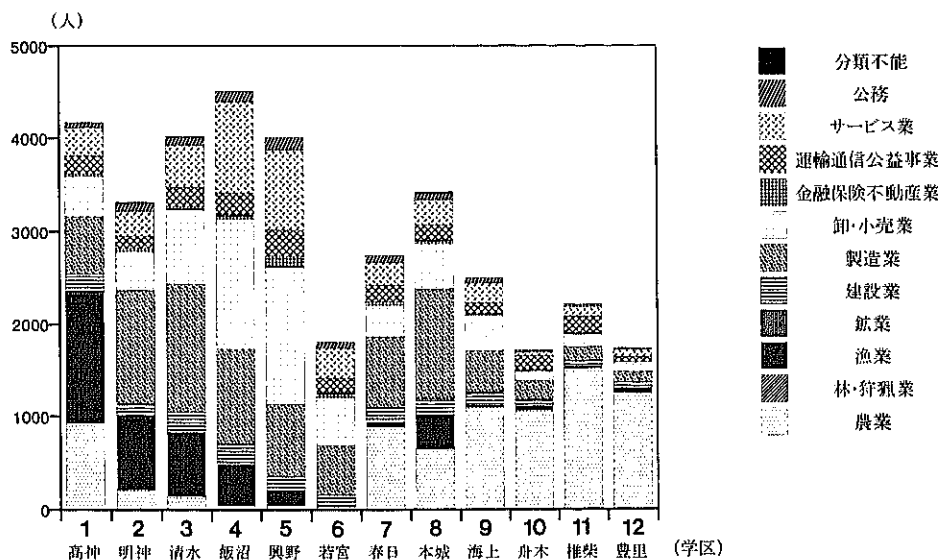
第4表と第5表はいずれも、1世帯が1業種に従事していると捉えた場合の統計結果を示したものである。しかし、世帯内部には各家族構成員の就業が複数含まれており、1世帯は多業種に従事

していると考えの方がより現実に即した捉え方であろう。では、1世帯の中で各家族構成員はどのような業種に就業し、それぞれの家族構成員やその就業はどのような関係を有しながら家族経営を維持していたのであろうか。ここでは特に漁家経

第3表 学区別の産業別有業者数—昭和30年(1955)—

	総数	農業	林業および狩猟業	漁業および水産養殖業	鉱業	建設業	製造業	卸売業および小売業	金融保険不動産業	運輸通信公益事業	サービス業	公務	分類不能の職業
総数	36117	7863	9	3855	106	1736	8392	6691	412	2025	4155	789	54
高神学区	4167	927	0	1381	45	185	618	440	23	189	306	49	4
明神学区	3318	216	0	748	36	137	1229	424	29	132	270	86	11
清水学区	4017	145	1	667	13	219	1388	802	38	205	446	84	9
飯沼学区	4508	47	1	426	3	232	1013	1416	46	227	980	111	6
興野学区	4002	49	0	145	1	163	768	1489	121	280	856	130	0
若宮学区	1797	33	0	9	0	112	531	517	51	152	326	65	1
春日学区	2741	886	0	37	5	164	759	353	36	178	242	80	1
本城学区	3426	650	0	358	3	173	1191	497	33	161	275	68	17
海上学区	2495	1097	0	14	0	143	443	396	14	116	220	49	3
舟木学区	1711	1063	0	38	0	78	196	106	6	56	46	20	2
椎柴学区	2208	1505	0	23	0	64	148	142	14	177	108	27	0
豊里学区	1727	1245	7	39	0	66	108	109	1	52	80	20	0

(「国勢調査結果概数」により作成)



第3図 鉾子における学区別の産業別有業者数
(「国勢調査結果概数」により作成)

注) 図中の番号は第4図に対応している。

営に焦点をあて、家族構成員レベルでの就業構成を検討する。まず資料として以下に昭和33年(1958)における子供の作文²¹⁾を提示し、そこに描かれた家族の生活を検討する。

(資料1)

「魚の町の生活」

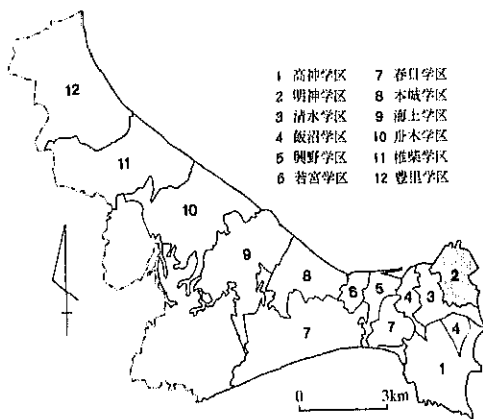
一番鳥の鳴くのもまた深夜の空気を破って「なぎだよー」という声と戸をたたく声が聞こえてくる。弟のわきで寝ていた母が「はいよー」と起き上がって、父の沖へ行く用意を始めるのを夢うつつで見ている。すっかり支度の出来た父は、カップやハンガーをもって家を出て行った。まだ三時頃なのだろうか、母は又床の中へはいつて寝たようである。私が起きた時はもう朝食の支度がすっかり出来ていた。(中略) 漁の有るなしで、私達の町の生活というものとは左右されていることになる。(中略) 月に決まった収入はいつて来ない。ある月は千円の金もいつて来ない時などがある。そういう時には本家が加工屋なので父や姉は日雇人となって働きに行く、漁がない時の仕事は、煮ば

しを入れる箱作りや、せいろ洗いなどをする。私も時々三時のお茶を運んで行ったりする。(中略) 近所の人達は内職に簾や、はまぐりかきなどをする。(中略) とし江さんが歩きながら「波崎町はかかあ天下だなあ」といった。そう言われてみると本当にこの町の女の人は男まさりの仕事をする。朝早く起きて、加工屋へ働きに行く。三輪車で運んで行きたいわしをおろしてタンクに入れたり、それを洗ってせいろへうすくしたり、大がまでたいたりする。たき上がったものをサイドカーで運ばし、おだの上へほし始める。家に帰れば子供の洗濯や食事の仕度などをしなければならぬ。(中略) ことに夏から秋にかけては、農家の方は取り入れ、漁師の方はサンマの仕度やらで町中がてんでこ舞いのようだ。

(3年生女生徒)

資料1から漁家経営の特徴として次の2点を指

第4表 明神学区における世帯主の産業(大分類)別世帯数および世帯人員—昭和30年(1955)—



第4図 銚子における学区

(銚子市教育委員会資料により作成)

注) 番号を付記していない部分は椎柴村・豊岡村の合併問題に関して昭和30年(1955)の国勢調査には含まれなかったと推測される。

		世帯数(戸)	世帯人員(人)
総数		1793	8878
合計		1564	8052
労働力者	小計	1547	7977
	農業	82	544
	林業・狩猟業	0	0
	漁業・水産養殖業	412	2239
	鉱業	28	155
	建設業	91	424
	製造業	422	2287
	卸売・小売業	225	1095
	金融保険不動産業	18	71
	運輸通信・公益事業	76	36
	サービス業	115	455
	公務	68	293
分類不能の産業	10	51	
完全失業者	17	75	
非労働力	229	826	
労働力状態不詳	0	0	

(『国勢調査結果概数』により作成)

第5表 明神小学校における在籍児童の保護者
職業一覧—昭和51年(1976)—

職業	戸数		
漁業	125	籐加工	5
水産加工	38	袋製造	1
海産物問屋	2	レンズ工場	1
水産用機器販売	1	洋裁	1
製缶工	4	縫製加工	1
鮮魚商	14	メリヤス業	1
漁業会製氷工場	1	クリーニング	4
網大工	3	内職	1
魚市場	1	手伝い	1
船大工	4	農業	2
冷凍機業	1	飲食店	14
冷凍食品業	1	行商	1
海運業	1	生花業	1
海員	2	八百屋	4
漁業協同組合職員	2	酒屋	4
会社員	152	自営業・自由業	7
工具	61	商店	2
運転手	53	店員	7
運送業	12	サービス業	5
鉄工業	20	米穀販売	1
鋳造業	2	肥料商	1
大工	12	石油店	1
塗装業	5	食堂民宿業	1
土建業	4	旅館雇人	1
建築業	9	理容業	1
建材業	6	調理師	4
配管工	3	新聞普及員	1
施工業	1	税理事務	1
タイル業	1	海上保安庁	1
プレス工	1	燃料配送業	1
ブロック製造販売	1	団体職員	4
瓦葺師	4	国鉄職員	3
瓦販売	1	私鉄職員	2
専職	8	公務員	22
左官	7	教員	4
電機工	4	医師	2
機械工	2	人夫	5
整備士	1	用務員	1
修理工	1	病院勤務	1
自動車修理業	3	マッサージ師	2
木工業	3	乗務員	1
製菓業	2	事務員	1
製麺業	1	郵便集配	1
家具業	1	浴場主	1
職人	1	無職	20
植字工	1	合計	736

注：1) 「漁業」には漁船員、船員漁夫を含む。
 2) 全生徒数976人のうち、兄弟姉妹のによる重複は252あった。したがって、世帯数に換算すると、722戸となる。
 3) 合計戸数が世帯数より多いのは、一部に1世帯で複数の職業記載があったためである。

摘できる。第1点目は、1人が複数の業種に就業している点である。資料1の生徒の家では、漁業による収入がない時に父は水産加工業に就業していた。これは主業である漁業が収入源として季節や天候により不定期性を有することに起因すると考えられる。第2点目は、漁家経営は家族構成員による複数の就業によって維持され、それぞれの就業が相互関係を有している点である。父だけでなく姉が水産加工業に従事しており、水産加工業そのものが、漁業と連動しているため、父と姉の労働サイクルは相互に関係していたと考えられる。また、父が漁に出る際には母がその準備をしたり、作者自身も水産加工場までお茶を運んでいたことは、家事を含めた就業の相互関係の一例である。籐加工業ははまぐりかきと並んで漁家における内職であり、主に漁家の世帯主の妻たちが従事していたこれらの内職は、漁家経営を維持する複数の業種の1つに位置付けられると推察される。

3) 漁家経営における子どもの役割

ここでは家族構成員の中でも特に、子どもの役割について検討する。

大正3年(1913)生まれのA²²⁾は大正末期から昭和初期における子どもの仕事として、漁業に用いられる「ぎす縄」の縄ない、「オモテ(籐表編み)」を挙げ、次のように語っている。「学校から帰ると勉強どころじゃない、縄ないで夢中でしたよ。売ったお金は親に出して、そこから小遣いもらうの。生活費の一部になっていたんですよ。オモテ(籐表)なんかも、私もアルバイトやりましたよ。うえの人が面倒がよくて、ハナツケ(鼻付け)とシリトメ(尻止め)はやってくれるんです。なかだけ編んで。当時、3足かそこら編んで35銭になったのかしら、とくにかく35銭ももらったことだけは覚えているの。とっってもうれしくて、おばあさんにお腰買ってやった。高等科1年だったかしら²³⁾」。

Aの稼ぎが生活費の一部になっていたと明記されていることから、子どもを含めた家族構成員の就業によって漁家経営が維持されていたことがわ

かる。簾加工業に関していえば、漁家の女性だけでなく、工程の一部は子どもが担う場合もあった。

次に波崎第一中学校の生徒の作文から、漁家経営における子どもの役割が記述されている作文を2点²⁴⁾抜粋する。

(資料2)

昼ごはんを食べて庭で隣りの幸二君とキャッチボールをしている時であった。浜に行っていた兄から「鰯を買ったからすぐかまをふったけろ。」と電話がかかってきた。ほくは幸二君とすぐにかまの下をもやし、「すのこ」を庭に運んだ。本家から姉たちも手伝いに来た。しばらくするとオート三輪で、鰯を三十箱くらいつんできた。ほくは幸二君と組んで鰯を干した。あついで手がまつかになった。そういう時は草をむしって手につけてまた干した。終わったのは午後五時頃であった。

(1年生男生徒)

(資料3)

ほくが夏休みになると始めるアルバイトがある「それは鰯上げ」である。まず運搬船がいわしを積んでくるとそれを魚市場に持って行って入札にかける。それで値段が決まり、買主が決まる。すると買主が箱を持ってくるからタマでその箱に魚を入れる。ほくの仕事はこの箱に入れるところだ。こんな仕事は生まれた時からあまり好きな方ではないが、家が家だから仕方がない。(中略) ぜにはじかにくれるのではなく鰯をくれるのである。多い時には一斗入りのバケツに二三ばいである。それを、ぜにに変えると大体三百五十円くらいになる。

(2年生男生徒)

資料2, 3では作文を書いた中学生自身が水産加工業に従事していた。昭和33年(1958)においても子どもは漁家経営の一部を担っていたことがわかる。夜中に船が港に入ると水産加工場では夜を徹して鰯をたき上げてしまうため、そのような夜が2, 3日も続くと、子どもたちは眼を赤くし

ながら教室の机に向かった²⁵⁾。

4) 漁家経営における女性の役割

「漁師へ嫁に来て、子供産んで育てて、じいさまは三度三度熱い飯でなければ承知しねえ人だったから、ちゃんと毎度炊いて、そつで暇が出来つと坐って、どれだけ助かったか知らないよ。この仕事(簾表)のおかげでね²⁶⁾」。この言葉は、漁家経済における家事・育児を含めた女性の役割を、簾加工業との関わりに触れて言及している。「暇が出来つと座つて」という言葉からは、漁家の女性達が家事・育児を含めた生活における様々な労働²⁷⁾の合間を見つけながら簾加工業に従事した様子が窺える。

昭和18年(1943)に漁師であった夫と結婚したB(大正11年(1922)生まれ)は水産加工業に従事しながら、簾加工業にも従事した。「今こそ月給でいっぱいくれるけど、昔はね、シケばかりあったわけ。お金が入らない。そつだからお母さんらが寝ないで水産加工いったり、こんなの(簾加工業)やってんの²⁸⁾」。Bは水産加工場に行く前に簾製品の縁だけ編んでおき、帰宅後その続きを編んだ。水産加工場はアグリ船の休漁期である6, 7, 8月は仕事が減少し²⁹⁾、シケの日には「早じまい」となるため、Bはそのような時に集中的に簾加工業に従事したと考えられる。鰯を獲るアグリ船に乗船していた夫は、休漁期には自分の天馬船に乗ってボラやイシモチを獲っていた。この時期のBの仕事として、夫が獲ってきた大きい魚は鮮魚店に卸し、それ以外の魚はボテ³⁰⁾に入れ、それを担いで行商に行くことが加わった。Bは昭和28年(1953)に長男を出産したが、涼しいところに簾を敷き、そこに子どもを寝かせながら夢中で簾を編んだことを記憶している。子どもが12, 3歳になると、編み上がった簾製品を問屋へ持っていく仕事を子どもが担当するようになった。

文集『麦』の執筆者の中にも簾加工業の従事者が含まれている。C(昭和7年(1932)生まれ)は簾加工業を職業としており、聞き取りからD

(昭和7年(1932)生まれ)は水産加工業とともに藤加工業にも従事していることが確認された。両者の夫は共に漁船員であった。2人の作文からは、1970年前後の漁家の生活と藤加工業を知ることができ、また漁家における家事・育児等を含めた家族内分業を垣間見ることができる。

Cは1日の生活リズムの中で、次のように藤加工業に従事している。

(資料4)

「二十四時間記³¹⁾」

(一) 行ってくるよ。行ってらっしゃい。

あたりはまだまだくらい

これで夫は、四、五日帰らない

寒いのに大変だと思う(五時)

(二) 行ってきます。行ってらっしゃい。

二人の子が出かける

学校が目先の。と、かけてくる靴の音

どうしたの?忘れ物!!又か。(八時)

(三) 学校の給食のチャイム、もうお昼

朝片付け、掃除、洗濯

やっと落ち着いて仕事始めて

まだいくらも出来ないのに(十二時)

(四) 只今あー。ああおかえり

学校から帰るのが早いかソロバンへ

おやつ食べてから行きな。遅れちゃう

よ!

なんとせわしい子だろう(四時)

(五) うわあーうるさい。テレビの音。

ほらほらご飯だから手伝って。

それもこれも、運んでね。

「何だ、母ちゃんもマンガ見て笑ってる」

「うん面白いね」(七時)

(六) おやすみなさい!おやすみ。

おやすみなさい!ああおやすみ。

子どもたちが、布団に入る。

今日も無事に過ぎた。

一つ二つと灯を消し

おやすみなさい……は沖の夫に。(九時)

これを見るとCは自宅で藤加工に従事しており、1日の生活の中で家事の合間、家族構成員との生活の合間に藤を編んでいることがわかる。夫や子供達がいないうちに「やっと落ち着い」た心境で藤加工に集中できたことが明記されているが、その他にも時間を見つけて藤を編んでいたと思われる。Cが藤を編む姿を見ていた長男の言葉からそれを読みとることができる(資料5)。

(資料5)

「永生きしてよ、母ちゃん³²⁾」

こゝ一週間程寒波襲来の為に冷たい風が続いたある日のこと、お昼御飯を食べた後長男が突然言った言葉だった。(中略)「ん、だってヨネ、僕がねていて見ていると母ちゃん何時も何時もそこで仕事(藤よし³³⁾)してるでしょうヨ、僕母ちゃんを見ていると何時までも何時までも生きていて貰いたい(中略)」(中略)永生きしてねというこの子等の為にも丈夫でいなくては、と思い乍ら仕事の手をうごかし続けた。

次の作文には、変化する家族のライフステージと、その中におけるCの生活が描かれている。

(資料6)

「わたしの手³⁴⁾」

(前略)結婚してやっと他人の台所からはなれて2人だけの楽しい、ママゴト見たいな台所仕事も束の間、今度は子供の出産で又々この手を酷使、それも年子で2人なのでおむつ洗いだけでも大変だった。

でも其の間には可愛い赤ん坊の口に、この手でお乳をふくませたり、その小さい体を風呂に入れたり、ヨチ、歩きともなると両手に1人ずつ手を引いて散歩したり楽しい、思い出がある。

おつむを洗ったり、赤ん坊の口にお乳を含ませたりしたCの手は、同時に藤を編む手でもあった。

Cが藤加工に従事する周辺状況としての夫の就業については、次の作文が注目される。

(資料7)

「海と夫³⁵⁾」

ぢりゝと照りつける暑さを全身に受けて、真黒に日焼けした顔をほころばせて夫が浜から帰って来た。

この顔だと昨晩は大分漁があったかな? 「お帰んなさい。漁あったの」「うんやつと思いがなかったよ」と言ってニコニコと話したところに依ると、この夏に入ってから一番漁だったとか。金額も大事に違いないが、それ以上にその魚「鱧(すゞき)のとれた時は何とも言えない程嬉しいと言う。夜縄と言って500米位の長い網に釣針を一定の間かくに90本位付けて、生きた海老を餌にして夜に入ってから海にはく。夜明けになって端から順々にたぐって上げて行くのだが、1尾2キロから3キロ位の大きな鱧が、ガボリッ、ガボリッとあばれて上がって来る時はひとりで顔がほころびるとか。昨晩は舟のカメラ杯に活かして一山いけすへ持って行ったと言う。

漁夫の子に生まれ漁夫として大人になった夫は海が大好き。冬は底引き船に乗り休みなく働き、夏2ヶ月間の禁漁期間中は自分の小舟で釣りをして働く、又この期間中が夫にとって一番楽しい働き甲斐のある時らしい。

(中略)朝3時頃起きて出かけて行き夕方まで漁をして居る時もあるし、夕方出かけて行き朝帰る時もある。

不漁の日が幾日か続いて私が「今の内に身体を休めておけば」と言っても「なーに泥棒と魚は何時くるか、わかんないからなあー」と言っでは海に出て行く。うす暗くなった海に船外機の音をひびかせて小さく消えて行く舟を見送ってなんだか心細くなる時もあるし、同時にあの人は海とは離れられない人なんだと心言い聞かす。

漁場は主に夫婦が鼻付近で、昼間そこへ行くと同じ様な小さい舟がたくさん居るのが陸地から良く見える。(中略)

なにかも白くのみこむ朝もやに

小舟の夫は首かしげつ、行く

(1968年8月上旬)

家族経営におけるCの夫の就業は資料7に書かれているように、大漁、不漁による収入の変動があるだけでなく、1年間の中で季節によって底引き船の漁船員として収入を得る時期と、自分の小舟の船主として収入を得る時期があった。また、漁に出る時間は天候や漁の具合に規定されて不規則であった。夏季の漁場の風景として夫婦が小舟に乗って漁をするものが多いことは注目される。C自身は夫の船に乗ることはなかったが、漁家の女性の中には夏季には漁業に従事し、かつ籐加工業に従事する者もいたことが想定され、Bの時代と同様の漁家経営のあり方がみられた。

次にDの作文を資料8として提示する。Dは外川の漁家に生まれた。Dの母(明治38年(1905)生まれ)は籐表を編んでいた。D自身は昭和33年(1958)に結婚した後、水産加工業に従事しながら、籐加工業にも従事した。この時期には母が編んでいた籐表ではなく、Dは主にバックレストを編んでいた。次の作文はDと家族の1日の生活を記録したものである。

(資料8)

「我家の一日³⁶⁾」

東の空が白んで来る頃、迎えのバイクの音とともに目をさまし、我が家の活動が始まります。(中略)「行って来るぞ」と力強い声を残して出かける夫を今日も大漁をと念じつつ見送る私。さあそれからが私の日課です。洗濯、朝食とまたたく間に時間が過ぎて行きます。子供達を学校へ送り出した後、私も職業婦人、祖母に後かたづけをまかせ働きに出かけます。塩干業(サンマの開き)です。「何ヶ月か前に夫の船も取ってきたサンマだわ」と思う時一匹一匹に親しみが湧き仕事に楽しさが加わります。5時過ぎ、帰宅。祖母の心づくしの風呂につかりながら「船のともろにうぐいすとめて³⁷⁾」と夫の歌声を背に私も「明日も大漁と鳴かせたい」と一緒

に口ずさみながら夕食の支度にとりかかります。

作文には記述されていないが、聞き取りによればDは水産加工場で魚の加工の合間に「箱ぶち³⁸⁾」の内職にも従事し、加工屋へ行く前、帰宅後など、時間の切れ目を縫うように、自宅で藤加工業にも従事した。朝ご飯を持参して朝4時頃から加工屋へ行くこともあった。Dの子供達は水産加工場へ寄って「いってきます」と言ってから登校した。

Dは「子供をなんとかして学校へやりたい」という思いで働いた。アグリ船に乗っていた夫は、子供の教育費が負担になる時期に「子供の学校が終わるまで」という契約で、アグリ船を降り、底引き船の乗船員となった。アグリ船は漁がなければ収入が得られないが、底引き船は確実に収入が得られたからである。ただし毎日帰宅するアグリ船に比べて、底引き船は2、3日、長いときで1週間夫が帰って来ないというサイクルが変わった。

Dが働いていた水産加工場は昭和49年(1974)に冷凍庫を導入したが、それまでは大漁の日には仕事が多く、不漁の日には仕事がないというように、漁業に規定されて仕事量変動した。藤加工業は水産加工場での仕事が少ない日や休みの日に行われており、Bの時代と同様の労働サイクルがみられた。

IV 漁家経営の特徴と藤加工業の役割

1) 就業構造の柔軟性

漁業の近代化に伴い大量漁獲システムが確立し、船が大型化したことにより、昭和61年(1986)における大中旋網漁船の出漁日中の不漁日は10%以下になったといわれるが、それ以前は出漁日の50%が漁獲のない不漁日であった³⁹⁾。

家族構成員全体の就業を見てみると、漁家経営は漁業のみによって維持されているのではなく、複数の就業が柔軟に組み合わせられることによって維持されていた。銚子市長崎の漁業を検討した矢野・柿崎⁴⁰⁾は、零細で生計維持的な個人経営にも

とづく小漁家漁業が漁期に規定されながら多種の漁法を組み合わせていることに言及し、女性を含む家内労働をも含めて多様な個人戦略を駆使することにより、本質的に漁業が内包している不確実性に対応していることを指摘した。漁家経営という視点からみると、藤加工業は特に女性の家内労働として、その一部に位置づけられるものであった。これは漁業が近代化する以前、つまり不漁日が多い中でも漁家経営が維持されるシステムであったということもできる。藤加工業は自宅のできる内職であり、漁家の女性にとっては漁業や水産加工業と比べて時間的、空間的制約を受けにくい就業機会であったために、家族経営を維持するための調節弁的な役割を果たしていたといえよう。

漁家の婦女子を労働力として雇う側である水産加工業者や藤加工業の間屋からみれば、季節や天候に左右されて流動する労働力を受け入れ、活用しながらその経営を維持しなければならないことになる。それを可能にさせる1要因として水産加工業者や藤加工業の間屋自体も家族労働力によって維持されていたことが注目されてよい。昭和21年(1946)において波崎の水産加工場を従業員規模別でみると従業員数10人以下の水産加工場は106あり、全体(113)の93.8%を占めていることがわかる⁴¹⁾。また、昭和48年(1973)の『商工名鑑』に記載がある18の藤加工業者の内、従業員数が10名以下であるのは15で全体の83.3%を占めていた。漁業もまた同様である。昭和33年(1958)の『沿岸漁業臨時調査漁業経営体調査結果概要⁴²⁾』によれば、漁撈作業従事者数別経営体数でみると、471経営体の内、10名以下の経営体は369であり全体の78.8%を占めていた。

2) 女性就業の特徴

銚子の女性の間には「空身^{からみ}かっぶるって意気地のないこと」という言葉がある。「空身^{からみ}かっぶるって」というのは、子供を誰かに預けて単身で働くことであり、この言葉にはそれにもかかわらず頑張りが足りない、頑張りなさいという意味が込められている。このような言葉の存在は逆に、

多くの女性が子供を背中に負ったり、仕事場に連れてきて働いたことを意味するものでもある。

女性が働く上での条件として聞き取り調査の中で多く聞かれたものは「時間に縛られず、子供に目が届く範囲」という条件であった。時間に縛られずという条件は、夫が漁業に従事していたり、季節によっては夫婦で漁業に従事するために、労働日数や労働時間にある程度の融通が必要であるという意味であろう。大正6年(1917)の『茨城県農家副業続々編』第8章⁴³⁾には、東下村の籐表生産に関して「他業との関係」という項において次のような記述がみられる。「籐表の製造は技術を要する故、売品として差支えなき程度迄に至るには、少なくとも二三ヶ月間位伝習をなすの要あり。然れども其の以後に於ては、季と時の如何に関せず任意に従事し得るに依り、毫も他業を妨げざるなり」。銚子沿岸地域に籐加工業が広く定着した要因として、籐加工業が有しているこのような特徴が漁家経営における女性就業として好適であったことは重要である。水産加工業もまた漁業と関連した労働サイクルを有しており、子供を連れて働くことができる点で籐加工業と同様、「時間に縛られず、子供に目が届く範囲」という条件を備えていたといえる。

一方、缶詰工場で働くことは、第3者からみれば水産加工場で働くことと類似のものと捉えられるが、働く当事者である女性達にとって、両者には大きな違いがあった。Eは(大正4年(1915)生まれ、南小川町在住)は戦前から水産加工場で働いていた。近所の女性達が20人程、ほとんどの人が子供を連れて働きにきていた。E自身も子供を背負って働いた。時間給であるため、「体が自由」であり、都合で休むこともできた。時々手は休めることもできるし、手を動かしながら仲間と冗談を言い合ったり、歌を歌うこともできた。昭和30年(1955)、近くの水産加工場が缶詰工場に転換した。水産加工場で働いていた仲間の半分は厚生年金がもらえる等の理由でその缶詰工場に移ったが、Eは移らなかった。その理由は、缶詰工場は子供を連れていけないことにあった。名洗

から来ていた女性達は、海女、行商、白魚漁に従事しながら、休漁期に水産加工場で働いていたため、通年勤務である缶詰工場に勤務することは困難であった。昭和39年(1964)のアンケート調査⁴⁴⁾は、籐加工業の内職に従事する女性が缶詰工場と比較して籐加工業の方が良いという解答が圧倒的に多かったと述べている。その理由として「家でできる」、「肉体的に比較的楽である」、「子供の世話ができる」、「留守番ができる」という理由が挙げられている。また、缶詰工場へ行かない理由として「時間制だから」、「立ち仕事だから」、「家の仕事(養豚、養鶏)を手伝う事ができないから⁴⁵⁾」という理由が挙げられている。

しかし缶詰工場のように保険や年金制度が整っており、「空身」で働ける一部の女性のみが雇用される就業機会が登場してきたことは、女性就業をめぐる時代状況として注目される動向である。

V むすびにかえて

一地域の産業への労働力供給主体としての家族一

本報告では、銚子における女性就業の中でも特に籐加工業に着目し、銚子沿岸地域における籐加工業と漁家経営の関係を明らかにすることを目的とした。本章では、籐加工業が銚子に立地した産業であったという点に立ち返り、地域産業と家族経営との関わりを予察的に述べ、むすびにかえたい。

籐加工業は漁家の婦女子に就業機会を提供した。一方、漁家は地域の各産業への労働力供給主体であり、籐加工業にも家族労働力の一部を提供した。籐加工業と漁家経営の関係はこのような相互関係の枠組みの中で捉えることができる。

銚子における籐加工業は原料立地ではなく、技術とともに原料を他所から移入しており、特に東京との取引関係が重要であった点で、利根川水運による東京とのつながりが寄与した側面があったと推測される。問屋や原料商等の存在とそれらによる産地内分業もまた、当地域で籐加工業が発展した1要因であった。これらが銚子において籐加

工業が定着する基盤となったことはいうまでもない。しかし一方では、漁家が簾加工業を主体的に自らの経営に取り入れたことが、当地域において簾加工業が定着し、発展するもう一方の条件として重要であったと考えられる。

漁家経営において簾加工業は漁家経営を維持する多就業の内の1つであった。また、簾加工業に従事することは、漁業が有している収入源としての不確実性を補うために漁家がとった1つの対応であった。簾加工業の主たる担い手である漁家の女性達は、他の家族構成員の就業、特に漁業との関わりを有し、家族のライフステージの変化との関わりを有していた。そのため簾加工業に供給される労働力は個人や家族の多様な状況に規定されて、伸縮性を有していたと考えられる。

労働力を確保する側である産業からみれば、家族が地域に展開する産業への労働力供給主体であった場合、常に家族経営の論理に規定される側面があったといえる。しかし、漁業や水産加工業などが季節的な繁忙期を有していた時代においては、地域内の限られた労働力を共有するために、伸縮性を有する流動的な労働力はむしろ好適であったということもできる。このような点で、地域に展開する各産業は、例えば漁業と水産加工業、簾加工業がそうであったように、相互補完的な関係を有していた。このような地域の構造が地域経済の安定を維持してきたということもできる⁴⁶⁾。

しかし、特に高度経済成長期以降において伝統的家族経営や女性就業は変化の過程を経る。女性の就業機会として保険や年金が得られ、フルタイムで働くことができる缶詰工場のような新たな就業機会が登場したことや、家族従業員と少数の雇用人によって維持されてきた水産加工業者が徐々に生産施設、生産規模を拡大したこと⁴⁷⁾、漁業の近代化に伴って漁業のサイクルや漁船員の賃金体系が変化したことは、漁家経営のあり方にも何らかの影響を及ぼしたものと思われる。そのような変化の過程を含めた検討は、今後の課題としたい。

付記

本報告の作成にあたり、永澤謹吾先生には資料の提供や調査の便宜のほか、多くのご教示を賜りました。現地調査の際には、岡見展明、加瀬久男、高橋なつ、田原榮作、竹内ふみ子、崎山すえ、藤村とき子の各氏には資料を提供いただいたほか、多くのご教示を賜りました。そのほか銚子市の多くの方々からご協力をいただきました。銚子市公正図書館、銚子市役所の皆様には、資料収集の際に大変お世話になりました。なお、平成12年度の歴史地理学実習では、筑波大学人文学類の井原恵理子氏のご協力を得ました。

以上、記して深く感謝申し上げます。

注および参考文献

- 1) 船曳作業を意味する。
- 2) 湯澤規子(2000): 漁業集落における女性の就業形態とその変容—銚子市長崎町を事例として—, 歴史地理学調査報告9, 19~32。
- 3) その中において、以下の研究は簾加工業を個別に扱ったものの1つである。中野典子・内藤静子・江口静子・石川悦子(1964): 簾製品の内職に従事する主婦, 千葉県立銚子高等学校社会科資料室編『銚子地域における婦人労働の歴史と現状』, 千葉県立銚子高等学校社会科資料室, 79~89。
- 4) ①銚子市史編纂委員会編(1956): 『銚子市史』銚子市, 615~616。②銚子市編(1983): 『続銚子市史Ⅲ昭和後期』銚子市, 117~123。③銚子市郷土教育研究会編(1958): 『わたくしたちの銚子』洋洋社, 73~74。④田林 明・川口 洋・丸山浩明・洪 顕哲・篠原秀一(1986): 波崎町舍利地区の生活形態とその変容, 地域調査報告8, 106ページ。
- 5) 宮本貞雄・内田重明(1958): 『魚の町の子供たち』篝火書院。
- 6) 前掲5), 142ページ。
- 7) この文集は聞き取り調査の過程で発見されたものであり、各執筆者の方々が所持しているものである。
- 8) 篠原秀一(1989): 銚子における漁港漁業の発展, 地理学評論62A-11, 792~811。
- 9) 前掲4), ①615~616頁。
- 10) 簾表は草履や下駄の表に使われるもので、挽簾を畳表の目のように纏んだものである。
- 11) 前掲4), ②118~120。
- 12) 注文によって簾を挽くもので、製造場の従業員ではない。

- 13) 前掲4), ①616ページ。
- 14) 前掲4), ①616ページ。
- 15) 銚子市編 (1983):『統銚子市史 I 昭和前期』, 銚子市, 60~62。
- 16) バックレストとは、金属製の構造材に、挽籐の網を張った背もたれで、暑い時季に汗をかかないように、自動車の座席に使うものである。地元の人々は通風器と称している。前掲4), ②120ページ。
- 17) 第二次世界大戦後においては、漁家の婦女子に限らず、一般家庭の婦女子も籐加工業に従事していたことは新たな傾向である。前掲4), ②122ページ。
- 18) 常世田令子 (1984):『浜の女たち銚子聞き書き』, 筑摩書房, 165ページ。
- 19) 銚子においては、水産養殖業はほとんど成立していなかったといえるが、ここでは統計上の分類名をそのまま記載した。
- 20) 兄弟姉妹による重複を除外して算出した。
- 21) 前掲5), 158~161。
- 22) 話者の名前はアルファベットで示す。その際、敬称は省略させていただいた。以下同様。
- 23) 波崎町史刊行委員会 (1985):『波崎の聞き語りⅢ』, 波崎町, 51ページ。
- 24) 前掲5), 144ページ。
- 25) 前掲5), 143ページ。
- 26) 括弧中は筆者注記。常世田令子 (1980):『醤油屋ばなし・海人がたり』, 崙書房, 128ページ。
- 27) 引用文には含まれていないが、漁家の女性は陸マワシという仕事も担っている。陸マワシには籠やリヤカーを準備して市場で漁船の入港を待ち、入港後に魚を荷捌き場へ運搬し値を付ける、伝票を書いて集計するなどの仕事が含まれる。前掲26), 94~97。
- 28) 括弧中は筆者注記。平成13年 (2001), 6月7日にご教示いただいた。
- 29) 水産加工屋の休漁期の対応は、休業、鰯節製造に転換などいくつかあり、それは水産加工屋の規模によって異なっていた。山下琢巳 (2000):『銚子における水産加工業の展開と土地利用の変遷—飯貝根地区を事例として—, 歴史地理学調査報告9, 78ページ。
- 30) 背負い籠の意味。
- 31) 下線部は筆者注記。明神町読書グループ編・発行 (1969):『麦』, 12, 6~7。
- 32) 明神町読書グループ編・発行 (1968):『麦』, 7, 23~24。
- 33) 銚子の人々は籐加工業のことを「籐よし」と称している。
- 34) 明神町読書グループ編・発行 (1970):『麦』, 17, 7~9。
- 35) 明神町読書グループ編・発行 (1968):『麦』, 10, 15~17。
- 36) 明神町読書グループ編・発行 (1967):『麦』, 2, 9~12。
- 37) 銚子の代表的な祝い唄である「きやり (木遣り)」の冒頭の歌詞。かつては大漁時の網上げの際にしばしば唄われた。戸石四郎・戸石房江 (1981):『銚子の民俗と方言』, 崙書房, 70~71。
- 38) 加工魚を入れる箱を作る作業。
- 39) 篠原秀一 (1989):『銚子における漁港漁業の発展』, 地理学評論62A-11, 804ページ。
- 40) 矢野敏生・柿崎京一 (1992):『磯浜における漁場開発過程と村落』, ヒューマンサイエンスリサーチ1, 39~75。
- 41) 酒井多加志・張長平 (1988):『茨城県波崎町における水産加工業の地域的展開』, 地域調査報告10, 77~78。
- 42) 銚子市 (1958):『沿岸漁業臨時調査漁業経営体調査結果概要』, 銚子市。
- 43) 下線部は筆者注記。波崎町史編さん専門委員会編 (1982):『波崎町史料Ⅱ』, 波崎町, 554~562。に再録されている。
- 44) 前掲3)。このアンケート調査は籐加工業に従事する女性50人を対象とし、回収率は82%であった。
- 45) 養豚や養鶏が家の仕事として挙げられている背景として、このアンケート調査が現在の銚子市松岸を対象として行われたことに留意する必要がある。松岸は漁業集落とは言い難く、その点で厳密には本報告における沿岸地域のデータとして提示することはできないが、主業との関係を考えるうえでは参考になると判断した。
- 46) 例えば、昭和初期の大恐慌期において銚子が大きな打撃を被らなかったのは、人口5万4000人程度の地域に、様々な産業があり、企業があったという構造に起因しているという指摘がある。前掲15), 60~62。
- 47) 昭和62年 (1987) の水産加工屋の平均従業員数は18.1人となり昭和21年 (1946) の6.7人と比較すると2.7倍になっている。平均従業員数の増加は冷凍工場によるところが大きい。従業員規模は昭和21年 (1946) と比べて分散している中で、51人以上という加工屋もみられた。前掲41), 77~78。